『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み（上）

菅原諭貴

はじめに

傑堂能勝（一三五五―一四二七）は、峨山の五哲、太源宗真（？―一三七一）の流れを汲む梅山聞本（一三三九？―一四一七）の法嗣である。傑堂は、いわゆる「越後四箇の道場」の本寺、村上の耕雲寺を開創して梅山を勧請開山とし、ここを基点として会下の学人に五位の玄風を挙揚した。

『耕雲傑堂和尚之入室』とは、傑堂が耕雲寺において、入室時の門人と問答商量を交わした語録集である。

本書は最初、鈴木鉀三氏により『傑堂能勝禅師五百五十回忌大遠忌記念誌』（村上郷土研究グループ、昭和五十一年九月七日発行）において紹介、公表された。次いで竹内道雄教授・鈴木直哉師により、本書の書き下しおよび解説・注解がなされ、『曹洞宗実践叢書』第十巻（大蔵舎）に所収された。

本書は筆蹟等の鑑定により、門人の南英謙宗の自筆本であることが認められている。実際、入室者七十八人中、法嗣の顕窓慶字・虚廓長清の名が存するのに、南英謙宗の名

は見当らない。おそらく本書は、南英謙宗が待者として師傑堂に仕え、入室者との問答商量を一々筆録されたものであろう。このような師資間の入室参問の具体的内容を如実に記したものは、これまで殆ど知られず、極めて稀有であり、それだけに禅の語録集として甚だ貴重な資料といえる。

本書の原本は、もともと和綴の形ではなく、和紙を細く折ったもので、四ヵ所綴っただけの表紙のないものであったが、知己に配布されるに至った（昭和五十二年三月八日付）。

全体の構成は、「耕雲傑堂和尚之入室」という題名の後に、冒頭にそれぞれ入室者の役職名あるいは大衆名が列記され、その下に師資間の問答商量が逐一記されている。また入室者は総勢七十八人で、役職名は九人、諱の一字と役職名が付されているもの十一人であり、残りの五十八人は僧名で記されている。さらに問答においては、傑堂は必ず学人の役職名に関わる内容、あるいは僧名の一字を取りあげて問を発するという形式を用いている。

本稿は、既に本学大学院文学研究科宗教学仏教学専攻、禅学禅思想史研究(I)博士課程後期（竹内道雄教授指導）における右の『耕雲傑堂和尚之入室』についての共同研究の成果を基に、私見を加えてまとめたものである。

口語訳をする上で特に、異体字・略体字・不鮮明な字体の解読、更には師資間の言詮不及底の境涯、そこに交わされる問答商量の内容を正確に把握し、表詮することに非常な困難を覚えた。本稿は、できうる限り原文に忠実な解釈を試みたが、筆者の浅学菲才の力量ゆえ、多くの誤りを犯していると思われる。不完全な箇所は、識者のご叱正を乞い、徐々に訂正補筆していきたい。

凡例

一、『耕雲傑堂和尚之入室』の本文は、鈴木鉀三氏編集の影印本を用いた。

一、上段には原文を掲げ、下段には訳文を記した。

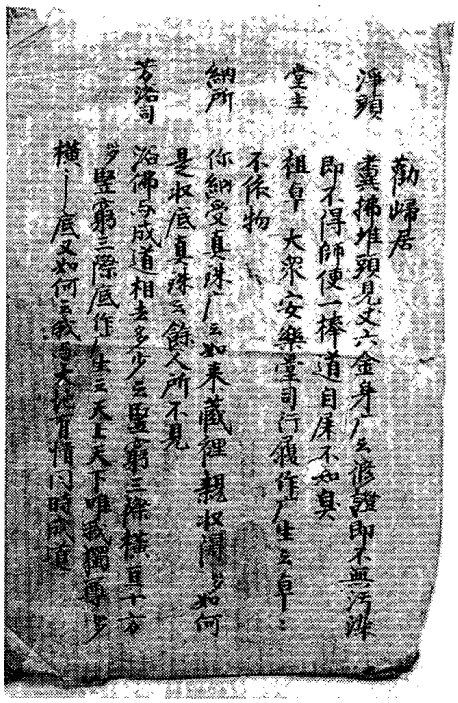
一、原文は白文であるが、読解に資するため、句読点・返り点・振仮名等を付した。

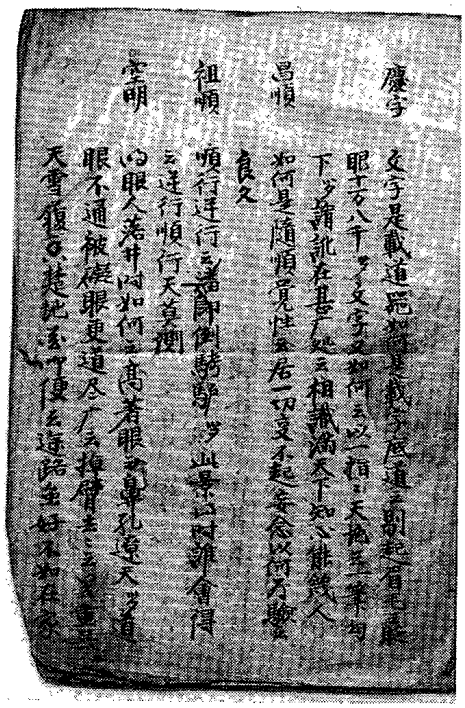
一、施註は語句の意味を記すとともに、原文に用いられた出典を明らかにすることにつとめた。

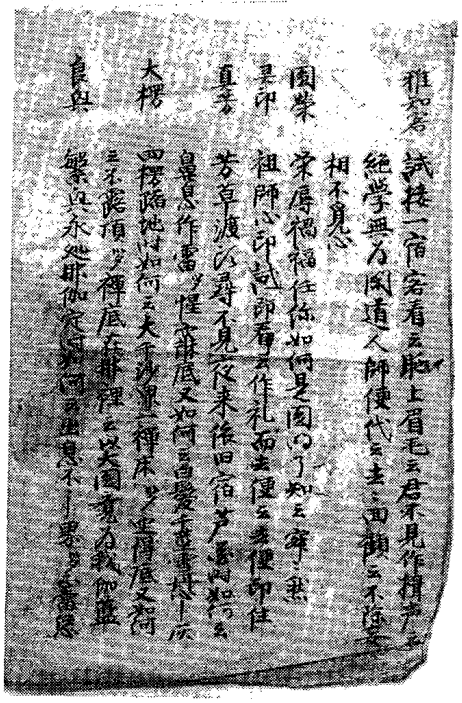
一、仏教語・禅語の常套語として、「――」等の符号で記されている箇所、あるいは脱落または省略と思われる語句については、筆者の理解の及ぶ範囲で補足をした。

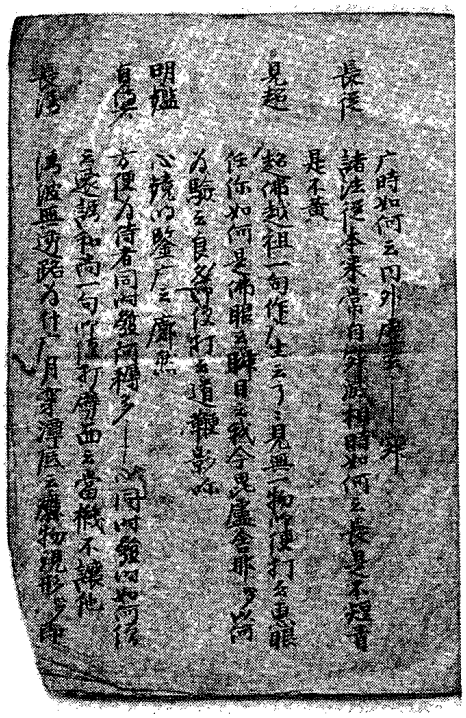
一、訳文において、原文の意味を補う必要がある時は〔　〕を用い、語句の意味を補う時は、その語句の下に（　）を用いた。

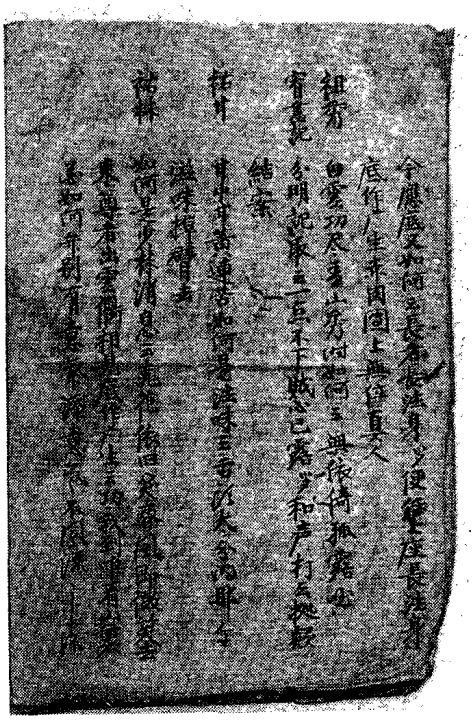
鈴木鉀三氏編　影印本『耕雲傑堂和尚之入室』











耕雲傑堂(1)和尚(2)之入室

維那　未レ下二一槌一時、一佛(4)在二什广処一。云、立身叉手。聞、正恁广時如何。云、我身中本有二無量佛法僧一。聞、下二一槌一時如何。云、以二此飯食等一供二養彼三寶一。聞、大衆安寧。云、萬福〻〻。

典座　潙山淨瓶踢倒(5)。典座更喚作二什广一。云、打二筋斗一(6)出去。

侍聖(7)　七佛師(8)在二什广処一。云、満目文殊是對談(9)。聞、與二一棒一又如何。云、掉臂去〻。云、和身沒却。師便云、作家侍聖。

殿司(10)　拂二酒殿堂一、你(11)行履作广生。云、實際理事不レ受二一塵一。万行門内不レ捨二一法一。(12)人好二佗郷一斯故国一。何情辛苦勸二帰居一。

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み（上）（菅原）

〔師は問うた〕一槌を下す以前は、十仏はいったい何処にいるのか。〔維那は〕言った。立身叉手。〔師は〕尋ねた。正にその時はどうなのだ。〔維那は〕言った。私の身中には本来、無量の仏法僧がいます。〔師は〕尋ねた。一槌を下した時はどうだ。〔維那は〕言った。この飯食をお供えして、仏法僧の三寶に供養いたします。〔師は〕尋ねた。大衆は安穏であるか。〔維那は〕言った。大いなる福楽に満ちています。

〔師は問うた〕潙山霊祐は浄瓶を蹴倒した。典座和尚、いったいこの沙汰をどのように名づけよう。〔典座は〕言った。とんぼ返りして出ていきます。

〔師は問うた〕過去七仏の師は何処にいるのか。〔待聖は〕言った。見渡すかぎり文殊は対談しています。〔師は〕尋ねた。一棒を与える時はどうだ。〔待聖は〕言った。臂を振って出てゆきます。〔更に待聖は〕言った。身ぐるに没します。師はそこで言った。汝は大丈夫の待聖であるぞ。

〔師は問うた〕仏殿の荘厳護持に努める汝の修行のあり方はどうだ。〔殿司は〕言った。一切の差別を超越した平等一如（真如実相）の世界は、一塵の汚れをも受けることがありません。また日常のあらゆる

浄頭(13)　糞拂堆頭見丈六金身一広(14)。云、修證即不レ無、汚染即不レ得(15)。師便一棒道、自屎不レ知レ臭(16)。

堂主(17)　祖卓、大衆安楽。堂司行履作広生。云、卓〻不レ依レ物。

納所(18)　你納受真珠一広。云、如来蔵裡親収得(19)。聞、如何是収底真珠。云、餘人所レ不レ見。

芳浴司　浴仏与成道一相去多少。云、竪窮三際一、横亘十方(20)。聞、竪窮三際一底作広生。云、天上天下唯我獨尊。聞、横——底又如何。云、我与大地有情一

つとめ（行持）においては、一法たりとも等閑にしません。人は異郷よりも故郷を愛します。どのような情も艱難辛苦の後、帰居することを勧めます。

〔師は問うた〕糞やごみの堆く積まれているところに、仏の姿を見ることができるか。〔浄頭は〕言った。修行によって證得することがなければなりませんが、修行と悟りとを各別することは、修證を汚すことになります。師はそこで一棒を食らわして言った。自分の大便は自分では、その臭いのはわからないものだ。

〔師は問うた〕祖卓、大衆は安楽である。堂司（主）としての行履はどのようなものだ。〔堂司は〕言った。なにものにもよりかかることなく、一人抽んでています。

〔師は問うた〕汝は真珠（仏性）を護持しているか。〔納所は〕言った。如来蔵の中にしっかりと納めています。〔師は〕尋ねた。如来蔵の中に納めている真珠とはどのようなものだ。〔納所は〕言った。他人の窺い知ることのできないものです。

〔師は問うた〕釈尊の誕生と成道の日から既に幾許の歳月が流れたか。〔芳浴司は〕言った。時間的には過去・現在・未来にわたり、空間的には十方に行きわたっています。〔師は〕尋ねた。時間的に過去・現在・未来にわたるとはどういうことだ。〔芳浴司は〕言った。全世界にお

同時成道。

慶字[21]　文字是載道器[22]、如何是載字底道。云、剔起眉毛[23]。云、眨眼[24]十方八千。聞、文字又如何。云、以二一指一指二天地一。云、一筆勾下[25]。聞、誦訛[26]在二甚广処一。云、相識満二天下一知心能幾人[27]。

昌順　如何是隨順覚性。云、居二一切事一不起二妄念[28]。以何為験。云、良久。

祖順　順行逆行[29]。潘即倒騎駈[30]。聞、此景此時誰曾得。云、逆行順行天莫測[31]。

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み（上）（菅原）

いて唯だ私一人が尊いということです。〔師は〕尋ねた。空間的に十方に行きわたるとはどういうことだ。〔芳浴司は〕言った。私と大地有情と同時に成道することです。

〔師は問うた〕文字は教えを載せる器である。文字を載せるところの道とはどのようなものだ。〔慶字は〕言った。眉をつりあげて見ようとすることです。〔更に慶字は〕言った。目を瞬きする間に十万八千もの彼方に過ぎ去ってしまいます。〔師は〕尋ねた。文字とはいったいどのようなものだ。〔慶字は〕言った。一指をもって天地を指差すことです。〔更に慶字は〕言った。一筆に棒を引いて消し去ることです。〔師は〕尋ねた。言葉で捉えられない肝要のところはいったいどこにある。〔慶字は〕言った。顔なじみは世間には山ほどいますが、腹うちわった仲間は、さて何人おりましょう。

〔師は問うた〕覚性に隨うとはどのようなことだ。〔昌順は〕言った。現実の一切事に身を置きながら、なお妄念を生じさせないことです。〔師は問うた〕いったいどのようにしてそれを証明するか。〔昌順は〕言った。黙って沈黙します。

〔師は問うた〕〔汝は〕順逆自在であるか。〔祖順は〕言った。機（境地）が熟すれば驢馬に逆乗りします。〔師は〕尋ねた。この様子をこの時誰がいったい会得するのだ。〔祖順は〕言った。逆行順行の自在

空明　明眼人落レ井時如何。云、高著眼。云、鼻孔遼天。聞、道眼不レ通、被レ礙レ眼更道尽广。云、掉レ臂去〻。云、笠重呉天雪、履香楚地花。師便云、途路虽レ好不レ如レ在レ家。

雅知客　試接二一宿客一看。云、眨二上眉毛一。云、君不レ見作レ揖声。云、絶学無為閑道人。師便代云、去〻。回顧云、不レ際二妄相一不レ覓レ心。

圓栄　栄辱禍福任レ你、如何是圓明了知。云、寂〻然。

霊印　祖師心印試印看。云、作礼而去。便云、去便印住。

なる働きは天も計り知れません。

〔師は問うた〕仏法の道理を究めた人が井戸に落ちる時はどうだ。〔空明は〕言った。高きところに目を向けます。〔更に空明は〕言った。鼻が天までのびます。〔師は〕尋ねた。仏道の眼に暗い。道眼が妨げられたならば、更に言い尽くすことができるか。〔空明は〕言った。臂を振って出てゆきます。〔更に空明は〕言った。呉の国の雪を笠に頂いて重々しく、草鞋は楚の国の花の香りを漂わせています。〔行脚僧のなんという風情な姿か〕師はそこで言った。〔諸方行脚の〕道程（風情）もよいが、家に住するには及ばない。

〔師は問うた〕試みに一宿客（永嘉玄覚）に接してみよ。〔雅知客は〕言った。眉毛をつりあげます。〔師は〕言った。汝は作揖の声をみたか。〔雅知客は〕言った。自由無礙の境地を得た人です。師はそこで代って言った。去れ、去れ。〔雅知客は〕振り返って言った。殊更に妄想を除くこともなく、真実を追い求める必要もありません。

〔師は問うた〕名誉と恥辱、禍いと福楽については汝にまかすとして、完全円満な悟りとはどのようなものだ。〔圓栄は〕言った。心が静かで澄みきった状態です。

〔師は問うた〕祖師の証得し来った心地を証明してみろ。〔霊印は〕言った。礼拝して去ります。そこで〔師は〕言った。立ち去るならば

真芳　芳草渡頭尋不レ見。夜来依レ旧宿二芦花一時如何。云、鼻息作レ雷。聞、惺寐底又如何。云、白髪千莖、雪丹心——灰。

大楞　四楞蹈地時如何。云、大千沙界一禅床。聞、坐得底又如何。云、不レ露レ頂。聞、禅底在二那裡一。云、以二大圓覚一為二我伽藍一。

良興　繁興永処二那伽定一時如何。云、出息不——界。聞、正當恁广時如何。云、内外虚玄——寂。

長従　諸法従二本来常自寂滅一相一時如何。云、長是不レ短、青是不レ黄。

直ちに印可証明しよう。

〔師は問うた〕芳しき草の辺りを尋ねても全く見えない。昨夜から相変わらず蘆花に宿っている時はどうなのだ。〔真芳は〕言った。鼾が雷鳴のように響いています。〔師は〕尋ねた。迷悟のところはいったいどうなのだ。〔真芳は〕言った。白髪は千本、雪は赤心「——灰」です。

〔師は問うた〕一切の知解を放下して不動著なる時はどうだ。〔大楞は〕言った。三千大千世界が一禅床です。〔師は〕尋ねた。坐禅三昧の境地はどうだ。〔大楞は〕言った。なんの形跡も見せません。〔師は〕尋ねた。禅はいったいどこにあるのだ。〔大楞は〕言った。仏の境界をそのまま自らの住居とします。

〔師は問うた〕煩悩が盛んにおこっている。永く禅定に住する時はどうだ。〔良興は〕言った。出る息はあらゆる対境に惑わされず、入る息は五蘊、十八界の身心（存在）に滞りません。〔師は〕尋ねた。正にその時はどうだ。〔良興は〕言った。内外（陰界・衆縁）共に空寂で執すべきものはありません。

〔師は問うた〕諸法は本来清浄にして、縁起・空の姿として現成する時はどうだ。〔長従は〕言った。長いものはもともと長く短とはなりません。青いものは青く黄色とはなりません。〔長は長、短は短、

見超　超仏越祖一句(48)作广生。云、了了見二無一物。(49)師便打云、恵眼任レ你、如何是佛眼。云、瞬目。云、我今毘盧舎那。聞、以レ何為レ験。云、良久。師便打云、道ヲ二鞭影一吽。(50)

明鑑　心鏡明鑒ナルヤ广。云、廓然。

貞侍者　方便為二侍者一、同時發二阿耨多（羅三藐三菩提カ）心。同時發時如何。僧云、迦（遐カ）請二和尚一句。師便打二劈面一(51)云、當機(52)不レ讓レ他。

長清(53)　清波無二透路一(54)、為二什广一月穿二潭底一。云、應レ物現レ形。(55)聞、即今應底又如何。云、長者長法身。(56)聞、便任二上座長法身一底作广生。赤肉団上無位真人。(57)

青は青、黄は黄、それぞれがそのままに法身の顕現であります。〔師は問うた〕仏位や祖位に住著しないところの一句はどうだ。〔見超は〕言った。心中一切の妄想分別を絶し、迷悟・凡聖・去来・起滅等の相がなく無相となることです。師は直ちに打って言った。恵眼のことは汝に任すとして、仏眼とはいったいなんだ。〔見超は〕言った。瞬目です。〔更に見超は〕言った。私は今、毘盧舎那仏です。〔師は〕尋ねた。どのようにそれを証明するのか。〔見超は〕言った。沈黙します。師は直ちに打って言った。鞭影を言うのだ。

〔師は問うた〕心は清らかで一点のくもりもないか。〔明鑑は〕言った。心はからりと開けて何の執着もありません。

〔師は問うた〕方便として待者となり、同時に阿耨多羅三藐三菩提心を発す。同時に菩提心を発す時はどうだ。僧は言った。和尚様の真実の一句を切に願います。師は直ちに真っ向から打ちつけて言った。その機会に直面したならば、決して他人に譲ってはならない。

〔師は問うた〕清らかな水には月影が透き通って行く跡をとどめない。どうして月の光は水底を貫くのか。〔長清は〕言った。仏の真法身は、あらゆる現象の規格に応じてその姿を現わします。〔師は〕尋ねた。ただ今、この場における物に応ずるところとはなんだ。〔長清は〕言った。長いものは長いままが法身の顕現であります。〔師は〕尋ねた。

祖秀　白雲功尽青山秀時如何。云、無依倚孤露咄。

宥書記　分明記取。[59]云、一点不下賊心已露。[60]聞、和声打。[61]云、拠疑結案。[62]

祐甘　甘草甘黄連苦、[63]如何是法味。云、舌頭太分明、那个滋味。[64]掉臂去。

祐林　如何是少林消息。[65]云、桒花依旧笑春風、[66]即微笑去来尊者。出雲衢相見底作广生。云、功我到唯看山裏花。如何弁別。[67]有意気添意気、不風流流。

『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み（上）（菅原）

それでは上座（長清）の長法身を委ねるところはいったいなんだ。〔長清は〕言った。この生身の肉体が凡聖、迷悟の二見を超越した何ものにもとらわれない真の解脱人です。

〔師は問うた〕白雲（煩悩）の働きが尽きて、青山が高く聳え立つ時はどうだ。〔祖秀は〕言った。倚りかかるものがなく、真実なる存在として全体がかくすことなく、はっきりと現われています。

〔師は問うた〕明白に心にとどめているか。〔宥書記は〕言った。些かも記さぬうちに、正体が丸出し現われています。〔師は〕尋ねた。かけ声と共に打つぞ。〔宥書記は〕言った。罪状にしたがって判決を下します。

〔師は問うた〕甘草は甘く、黄連は苦い。仏法はいったいどのような味だ。〔祐甘は〕言った。私の舌は非常に明白であります。〔師は〕言った。どこがいったよき味わいだ。〔祐甘は〕臂を振って立ち去った。

〔師は問うた〕菩提達磨が伝えた仏法はどのようなものだ。〔祐林は〕言った。桃の花は相変わらず今までどおり春風に咲き、往来する尊者たちは、皆それを見てほほえみます。〔師は〕言った。雲の通い路を抜け出て相見するところはどうだ。〔祐林は〕言った。功徳（はたらき）は私にいたって山中の花を見るだけです。〔師は〕言った。いったいどのように識別するのだ。〔祐林は〕言った。いやが上にも意気があ

禅覚　覚即夢、更知覚広。云、世間空〻無、仏性空〻(68)真。

がり、殺風景さにも味があります。〔徹底した殺風景さは、実はめでたい風景の現成であり、味けのないところが味わい深いところであります。〕

〔師は問うた〕覚醒してみればみな儚い夢のようなものである。更に思慮すべきことがあるか。〔禅覚は〕言った。世間は因縁和合によって生じたもので、それは仮の姿であり、本来は無（不実）であります。仏性は縁起・空としての働きであり真実そのものであります。

球知客　是賓主　是主。云、便喝。云、賓主歴然。(69)師打二劈口一(70)云、掉レ臂出去。

〔師は問うた〕賓主であるか、それとも主であるか。〔球知客は〕言った。直ちに一喝した。〔球知客は更に〕言った。賓位と主位の対立は歴然分明にして相犯しません。師は口めがけて打って言った。臂を振って出てゆけ。

行琳　行亦禅時如何。云、歩〻不レ運二方外一。聞、坐亦禅時如何。云、安二住無漏一。聞、為二什広一又道レ非二坐臥一。(72)云、官不レ容レ針——馬。(73)

〔師は問うた〕日常生活万般が禅であるとはどういうことだ。〔行琳は〕言った。日常底の一挙手一投足の中に禅はあり、世俗を超越した彼方に求めるものではありません。〔師は〕尋ねた。坐禅が禅そのものであるとはどういうことだ。〔行琳は〕言った。一切の煩悩を遠離した無漏に安住することです。〔師は〕尋ねた。道はどうして坐臥の姿にとらわれないというのか。〔行琳は〕言った。公には針ほども許さないが、方便のためには自由自在に言葉を用います。

祐花　心花発明時如何。云、清香薫徹尽二閻浮一。(74)

〔師は問うた〕心の花が満開となった時はどうだ。〔祐花は〕言った。

天拝　礼拝ノ意旨如何。云ク、天道無シ私。

道安　安楽ノ法門(75)如何商量ス。云ク、都莫テ思量スルコト。聞ク、道安楽吽。云ク、国清クシテズ不レ謳ハ太平ノ歌ヲ。

高春　春色ニシ無ク高下ノ(76)道ヒ吽。云ク、花枝ハ自ラ短長アリ。聞ク、短長又如何。堅一掌(77)。聞ク、痛與テ一頓ヲ(78)云ク、且語クレ。云ク、風頭ニ稍硬(79)――量(80)。師テ収ル竹篦ヲ云ク、春晴二月初――則(81)。

清らかな香りが漂い南閻浮州を包みこみます。

〔師は問うた〕礼拝の真意はどのようなものだ。〔天拝は〕言った。天の道（自然の原理）は、無我であり、自我意識以前のいとなみ、絶対の姿であります。

〔師は問うた〕安楽の法門（坐禅）はどのように思いはかるのか。〔道安は〕言った。思慮分別することではありません。〔師は〕尋ねた。道安、汝は安楽であるか。どうだ。〔道安は〕言った。国が治まっている時は、殊更に太平の歌など歌いません。

〔師は問うた〕春の景色には上下の差別などない。どうだ。〔高春は〕言った。花の咲く枝にはそれぞれ長いものもあり、短いものもあります。〔師は〕尋ねた。長い短いとはいったいどういうことだ。〔高春は〕平手打ちを一ぱつした。〔師は〕尋ねた。痛一頓を与えて言った。まあちょっと言ってみろ。〔高春は〕言った。風は少し強く吹いています。（――量）。師は竹篦を収めて言った。陽春二月の初旬（――則）。

注

（1）霊樹山耕雲寺。越後（新潟県）村上市門前にある。傑堂能勝が応永元年（一三九四）に、その師梅山聞本を開山として開創した。耕雲寺の詳細については、竹内道雄教授「耕雲寺の歴史と傑堂・南英師資の偉業について」（『道元と曹洞禅の研究』所収、名著翻訳出版会、平成四年五月）三六一―三七七頁参照。

（2）傑堂能勝（一三五五―一四二七）。河内（大阪府）の人。『耕雲傑堂和尚之入室』口語訳の試み（上）（菅原）

俗姓は橘氏。楠木正成の裔孫とされる。伝記等については、鈴木鉀三氏「傑堂能勝禅師伝記資料と若干の考察」（『傑堂能勝禅師五百五十回大遠忌記念誌』、村上郷土研究グループ、昭和五一年九月七日）、佐藤秀孝氏「耕雲寺傑堂能勝伝について㈠」（「曹堂宗宗学研究所紀要」創刊号、昭和六三年三月）、佐藤秀孝氏「傑堂」（『道元思想のあゆみ』2、曹堂宗宗学研究所編、平成五年七月）参照。

(3) 一槌　叢林では大衆に告報する時、槌を打って驚覚し、その後知らせる。作務・展鉢など一切の告報に用いる。ここでは展鉢時を仮定して問答が行われている。

(4) 十仏　十仏名のこと。旧説では道安の定めるところといわれる。『永平清規』では十一仏の名がみられるが、『正法眼蔵安居』には「大乗妙法蓮華経」を省き、十仏名としている。

(5) 潙山趯倒浄瓶　潙山霊祐が百丈懐海の会下にあって典座を務めていた時の公案。『無門関』四〇（大正蔵四八、二九八a）・『伝灯録』九、潙山霊祐章（大正蔵五一、二六四c）。

(6) 打筋斗　とんぼがえりすること。翻筋斗。

(7) 侍聖　聖侍のこと。聖僧侍者。僧堂中央に奉安する聖僧（文殊菩薩・観音菩薩等）の供養を任ずる役職。

(8) 七仏師　文殊菩薩のこと。智慧第一の文殊菩薩は、過去七仏の師であるという。百丈懐海が最初に言ったといわれる。

(9) 満目文殊是対談　『碧巌録』三五（大正蔵五一、一七四a）。

(10) 殿司　知殿や殿主と同じで、仏殿のことを掌る役職。

(11) 殿堂　仏祖の像を安置して儀式等を修する建物。仏殿・法堂等をいう。

(12) 『伝灯録』九、潙山霊祐章（大正蔵五一、二六五a）に、「実際理地不受一塵、萬行門中不捨一法」とある。

(13) 浄頭　叢林で厠を清掃し、洗浄水等を汲む役職。

(14) 『碧巌録』八七、本則評唱（大正蔵四八、二一二a）に「去糞掃堆土、現丈六金身」とある。

(15) 『伝灯録』五、南嶽懐譲章（大正蔵五一、二四〇c）に「修証不無、汚染即不得」とある。

(16) 自屎不覚嗅　『碧巌録』七七、頌古著語（大正蔵四八、二〇四c）。

(17) 堂主　堂司のこと。①延寿堂主の略。延寿堂内の諸事を掌る役職。②僧堂内の諸事を掌る役職。ここでは前者に当るか。

(18) 納所　寺務を処理する役職。

(19) 如来蔵裡親収得　『従容録』九三、本則評唱（大正蔵四八、二八七b）。

(20) 竪究三際横偏十方　三世十方に偏満し、時空を尽していること。『従容録』五四、頌古著語（大正蔵四八、二六二a）・『碧巌録』四七（大正蔵四八、一八三a）。

(21) 顕窓慶字（？―一四三三）。越後（新潟県）の人。幼にして耕雲寺の傑堂について得度し、その法を嗣ぐ。雲洞庵（新潟県）の開山（初祖）。

(22) 載道器　教えを載せる器。文字のこと。
(23) 剔起眉毛　眉毛をつりあげてものをみようとするさま。
(24) 眨眼　まばたきすること。
(25) 一筆勾下　一筆に棒を引いて消すこと。『碧巌録』四四（大正蔵四八、一八〇c）。
(26) 諸訛　言葉でとらえられない肝要のところ。「諸訛在什麼処」『碧巌録』三八（大正蔵四八、一七五c）・『従容録』一七（大正蔵四八、二三八a）。
(27) 『宗鏡録』一二六（大正蔵四八、五六四b）に「相識満天下、知心能幾人」とある。
(28) 居一切事不起妄念　『従容録』四五（大正蔵四八、二五六a）にある。
(29) 順行逆行　禅僧の修行の手段が順逆自在であること。『永平広録』㈢には「只如順行三千逆行八百、又作麼生商量」とある。
(30) 倒騎驢　驢馬に逆乗りすること。
(31) 逆行順行天莫測　『碧巌録』八四（大正蔵四八、二一〇a）。
(32) 明眼人落井　青原下、雲門文偃の法嗣、巴陵顥鑑と僧との問答。『碧巌録』（大正蔵四八、一五四b）、『聯灯会元』十五、巴陵顥鑑章（続蔵一三八、二八一裏下）。
(33) 高著眼　高くまなこをつける。相対を絶してものの根源そのものをみることを喚起する語。
(34) 鼻孔遼天　鼻が天までのびる。高慢。『碧巌録』八七（大正蔵四八、二一二c）。
(35) 『詩人玉屑』に「笠重呉天雪、鞋香楚地花」とある。諸方を行脚する修行僧の風情を讃えた語。
(36) 接一宿客　『碧巌録』三一（大正蔵四八、一七一a）・『従容録』十六（大正蔵四八、二三六c）。一宿覚は六祖慧能の法嗣、永嘉玄覚のこと。
(37) 眨上眉毛　『碧巌録』九七（大正蔵四八、二二一a）・『雲門録』上（大正蔵四七、五四七b）。
(38) 『証道歌』（大正蔵五一、三九五c）に「君不見絶学無為閑道人、不除妄想不覓真」とある。
(39) 祖師心印　祖師が証得単伝しきたった心印をさす。祖師の悟りそのもの。
(40) 『禅林類聚』九、姓名門（続蔵一一七、五三表上）に「仏祖位中留不住、夜来依旧宿蘆花」とある。仏祖の位には腰をすえておれず、昨夜から相変わらず蘆花に宿り。
(41) 典故不明。李白『秋浦歌』に「白髪三千丈、縁秋似箇長」の語あり。
(42) 四楞（稜）蹋地（著）　腰掛の四隅の脚がしっかり地についていること。一切の知解を放下して不動著なこと。『伝灯録』二一、羅漢桂琛章（大正五一、三七一c）・『円悟語録』八（大正蔵四七、七四七b）。
(43) 不露頂　『大慧語録』九（大正蔵四七、八四六c）に「高高峰頂立不露頂、深深海底行不湿脚」の語あり。なんの形跡

もみせない見事な立ち回りをいう。

(44) 以大円覚為我伽藍　『円覚経』（大正蔵一七、九二一a）。

(45) 那伽定　仏の禅定。

(46) 『従容録』三（大正四八、二二九a）に「入息不居陰界、出息不渉衆縁」とある。入息・出息は呼吸のこと。転じてあらゆる行履。陰界は五蘊・十八界で身心・存在。衆縁はあらゆる対境。一切の行動が自己の識中心に滞らず、対境に迷わされないこと。

(47) 『法華経』方便品（大正蔵九・八b）に「諸法従本来常自寂滅相」とある。諸法は本来寂滅清浄にして常住不変であること。

(48) 超仏越祖　仏や祖を超越すること。『碧巌録』七七（大正蔵四八、二〇四b）。

(49) 無一物　生死・涅槃・迷悟・凡聖・去来・起滅等の相がなく、畢竟無相なること。自己本来の姿をいう。『六祖壇経』行由（大正蔵四八、三四九a）。

(50) 咄　間投詞。「嘗」に同じ。詰問の余声。何かを指し示すことによって反問したり、それへの注意を促したりする。

(51) 劈面　まっこうから。まともに。「擘面」とも書く。

(52) 当機　その機会に当って。その場に応じて。その機をのがさず。「当機不譲父」『従容録』十三、著語（大正蔵四八、二三五b）。

(53) 長清（？―一四五五）。号は虚廓。初め講肆に出家したが、後耕雲寺の傑堂能勝に参じてその法を嗣いだ。能登総持寺に出世し、後法兄の顕窓慶字の後を嗣いで慈光寺に住した。

(54) 清波無透路　きれいな水には月影の透き通って行くあとをとどめない。没蹤跡のさまにいう。『雲門録』上（大正蔵四七、五四五b）。

(55) 応物現形　大海にも水溜りにも月はまるごと影を映すように、仏の真法身はあらゆる現象の規格に応じて姿を現わす。『碧巌録』四七、本則評唱（大正蔵四八、一八三b）。

(56) 『碧巌録』五〇、頌著語（大正蔵四八、一八五b）に「長者長法身、短者短法身」とある。長いものは長いままに法身の顕現、短かいものは短かいままに法身の顕現である。

(57) 赤肉団上無位真人　『臨済録』上堂（大正蔵四七、二九六c）にある。赤肉団は赤裸々な肉体をいう。無位真人はいかなる枠にもはまらず、一切の範疇をこえた自由人。

(58) 『貞和集』・『円悟語録』九（大正蔵四七、七五三c）に「白雲尽処是青山」とある。白雲はここでは煩悩に喩える。

(59) 記取　覚えおく。ちゃんと記憶する。

(60) 賊身已露　猫を被っていても正体が暴露していること。正体が看破られていること。『碧巌録』二、本則著語（大正蔵四八、一四一b―c）。

(61) 和声便打　「打て」と命令形で読む。かけ声とともに打つの意。『碧巌録』三七、本則著語（大正蔵四八、一七五a）。

(62) 拠款結案　罪状にしたがって判決を下す。言語動作によ

って人の修行の進境を見破る。『碧巌録』一、頌著語（大正蔵四八、一四一a）。

(63) 甘草甘黄蓮苦　甘草は甘く、黄蓮はにがい。本性はかえられないこと。『伝灯録』二五、羅漢守仁章（大正蔵五一、四一二a）。

(64) 滋味　味わい。よい味わい。美味。

(65) 少林　達磨の別称。

(66) 崔護の『本事詩』十四に「人面不知何処去、桃花依旧笑春風」とある。桃花のようだったあの人の顔は一体どこに消えたのだろう。桃の花はもとどおりに春の風に咲いているのに。

(67) 『白雲守端禅師広録』（続蔵一二〇、一二八裏下）四に「有意気時添意気、不風流処、亦風流」とある。いやが上にも意気があがり、殺風景さにも味がある。徹底した殺風景さは、実はめでたい風景の現われである。

(68) 聖徳太子の『天寿国繡帳銘』に記されている「世間虚仮、唯仏是真」の語によるか。

(69) 宿主歴然　賓位と主位の対立は、歴然分明にして互いに相犯さないことをいう。『臨済録』上堂。（大正蔵四八、四九六c）。

(70) 劈口　口をめがけての意。

(71) 『証道歌』（大正蔵五一、四六〇b）に「行亦禅、坐亦禅、語黙動静体安然」とある。禅は坐禅だけにあるのではなく、行住坐臥、日常生活のすべてのものの上にあるということ。

(72) 『伝灯録』五、南嶽懐譲章（大正蔵五一、二四〇c）に「若学坐禅、禅非坐臥」とある。

(73) 『伝灯録』二二、双峯竟欽章（大正蔵五一、三八五b）・『臨済録』行録（大正蔵四七、五〇六b）に「官不容針、私通車馬」とある。表面は容易に法をまげないが、裏面からはどんなものも通す。方便のために自在に言葉を用いること。

(74) 心花発明照十方刹　心の花が満開となって智慧の光りが十方を照すこと。『円覚経』普覚菩薩章（大正蔵一七、九二〇b）・『碧巌録』八六、本則評唱（大正蔵四八、二一一b）。

(75) 安楽法門　『普勧坐禅儀』（『道元禅師全集』第五巻、六頁）に「所謂坐禅非習禅也。唯是安楽之法門也」とある。また『正法眼蔵弁道話』（『道元禅師全集』第二巻、四七〇頁）にも「坐禅はすなはち安楽の法門なり」とあり、安楽法門とは、端的に坐禅であることが示されている。

(76) 『円悟語録』九（大正蔵四七、七五四b）に「春色無高下、花枝自短長」とある。春の景色に上下の差はないが、花の咲く枝はそれぞれに長いのもあり短いのもある。

(77) 一掌　平手打ち一ぱつ。

(78) 一頓　一回の意。「一頓棒」の略。

(79) 風頭　風のふくところ。風の模様。

(80) 風頭稍硬——量　典故不明。

(81) 春晴二月初——則　典故不明。